

釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会

環境教育ワーキンググループ(第7回)

議事要旨

平成 23 年 1 月 25 日 (火) 13 : 30 ~ 15 : 30

釧路地方合同庁舎 4 階 共用第 3 会議室

【出席者 (敬称略) 】

環境教育ワーキンググループ構成メンバー

< 個人 (所属) >

- ・ 神戸忠勝
- ・ 高橋忠一

< 団体 (出席者) >

- ・ 釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 (鈴木久枝)
- ・ 釧路市民活動センターわっと (藤田育久)
- ・ こどもエコクラブくしろ (近藤一燈美)
- ・ NPO 法人 環境把握推進ネットワーク - PEG - (照井滋晴)

< 教育行政関係機関 (出席者) >

- ・ 北海道教育庁釧路教育局 (上出秀信)
- ・ 釧路市教育委員会指導主事室 (渡邊直子)

< 関係行政機関 (出席者) >

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 (野口明史)
- ・ 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター
(宮本元宗、朝倉基博)
- ・ 釧路市《釧路国際ウェットランドセンター、釧路湿原国立公園連絡協議会》
(菊地義勝)

環境教育ワーキンググループ事務局

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 (伊藤俊之、竹中康進)
- ・ 財団法人北海道環境財団 (久保田学、山本泰志、清水美希)

【議事概要】

事務局 第7回環境教育ワーキンググループ(以下「環境教育WGと表記」)を開催する。
今回初めて参加する委員の方もいるため、最初に簡単に自己紹介の場を持ちたい。

(参加者全員自己紹介)

事務局 資料の確認をしたい。(配布資料の確認)

事務局 進行を高橋座長にお願いする。

議事1 今年度の環境教育ワーキンググループの活動報告

(以下、高橋座長による進行)

高橋座長 本日は2つの事柄についてお話をしたい。最初に、今年度の活動報告について事務局より説明を求める。

事務局 資料1に基づき、学校における実践事例の情報収集と提供の状況、教員研修の2回の実施状況、湿原を題材とした学習と教科学習との関連性整理の状況等について説明。

高橋座長 只今の報告について質問があれば、ワーキンググループとしては、こうした形で、釧路地域の教育の中でどのように釧路湿原に関しての認識を広められるか、勉強が進むか、関心が持たれるかを考えてみたい。教育における地域性についても考えてみたい。この活動について感想があれば。

上出委員 すばらしい活動である。子供達を交えて事業を実施する場合に、児童会館等に対する呼び掛けだけでは不足であり学校を介して呼びかけている。総合学習の時間は非常に貴重であった。教科別の教育とは違い、学校でテーマを決めて取り組むことができたので、地域の実態を絡めた場をつくるには非常に有効であった。報告にあったように、平成23年度以降、時間帯が縮小していく中で、如何に学校とのパイプを維持していくかは今後の課題である。

高橋座長 まもなく新学習指導要領が本格施行され、総合的な学習の時間に割かれる時間が多少減ることになる。そこで、教科の中で扱うことを考えていこうとしている。また、総合的な学習の時間が減る事で、体験型の学習や地域の文化などを子ども達が身に付ける場が減るかもしれない。そうした状況の中で、現在のような活動をどのように有効に行っていくことができるかを考えたい。学校教育の立場から感想などあれば。

渡邊委員 総合的な学習の時間は学校裁量なので、その時間に湿原を扱えるのがベターと考える。今回の学習指導要領の改訂で、小学校に外国語活動が入ってくることになり、学校ではそちらに気持ちがいっている部分もあり、授業数も増えることになる。これらの状況の中で、総合についての意識が少しだけ遠のいている感覚はある。地域性という部分でいえば、学力向上や体力向上が言われている中で、先生方だけでは子ども達を育てられない状況になってきており、地域や家庭と学校とが一緒になってやっていかなくてはならない部分が、どんな分野でも出てきている。湿原に行くだけの時数が取れない場合でも、例えば、ゲストティーチャーとして来ていただいたり、鶴野小学校や昭和小学校であれば学校近郊に湿原環境があるので、フィールドワークに付き添っていただくなどは可能ではないかと感じた。次年度に釧路教育研究センターと指導主事室が合体す

るが、教員研修は継続していけるようにしたい。先生方も知識がないと子供達に伝えられないと考えている。

高橋座長 ゲストティーチャーとして招かれることがあるか。

近藤委員 青葉小、阿寒高校など。博物館関係の植物の授業で、今年は釧路小学校の2年生の授業に行った。

高橋座長 そうした形での学校と地域が共同し合うということは少しずつ広がっていると認識して良いのかもしれない。教員研修については、今年度から2回講座になったところなので、次年度も継続できればと考えている。

議事2 教科単元における湿原を題材とした学習の検討

高橋座長 総合的な学習の時間だけではなく教科の単元の中で湿原を題材とした学習が可能か、これから実際に教科書を見ながらアイデアを出し合いたい。進め方について事務局から説明を求める。

事務局 教科でどのように活用いただけるかを検討するにあたって、小学校の教員や教育委員会の方にヒアリングを行い、収集した意見を資料2にまとめている。(資料2に基づいて説明) こうした教育現場からの意見を前提に本日のワークを進めていきたい。社会科5・6学年、理科5学年、理科6学年の3班に分かれ、それぞれに置いている教科書を見ていただきながら、それぞれの項目の中で釧路湿原のことを上手く紹介し知ってもらいながら、授業の成果もあげてもらえるような、切り口やとりまとめる情報のアイデアを出し合ってみよう。アイデアは付箋に書いて模造紙に記載している該当項目に貼りつけていただき、ワーク終了後に各グループより発表いただいて共有したい。今回委員の方より出されたアイデアを参考にしながら、他の教科、学年についても今後取りまとめていきたい。なお、来年度の教科書はまだ入手が出来ないことから、今回準備した教科書は今年度までの学習指導要領に基づくものであるが、来年度についても大きくは変わらない見込みなので、今年度の教科書を使って1時間程度かけてアイデア出しの作業をお願いしたい。

高橋座長 アイデアを出す時は自己規制を行わず、自由な発想から出していただきたい。

(各自の希望に応じて席を移動後、テーブルごとにグループワーク)

(グループワークの結果を共有)

<5年理科>

野口委員 我々が小学校の時使っていたものとは随分違う印象を受けた。話を引き込むための地域の特徴があると良いということで、「春になって」では山菜採りを挙げた。学校では4月に学ぶ項目だと思うが、釧路地域が教科書にあるような状況になっているかと考えると難しいかと思うが切り口として。「発芽と成長」ではヒシの繁茂や環境による成長の違い、ドングリやクシロハナシノブなどを育てていこうということを材料として発芽と成長を見ていければ良い。「気温の変化 天気の変化」では釧路湿原におい

ては霧や低温、北海道の中でも小雪ということなどを見ていくことが出来る。「新しい生命」ではヤチマナコでの生命誕生。湿原の中に新しい小宇宙（生態系）が出来、そこに新しい命が出来ていくという話題や、サケやシシャモの卵を育てることなども面白い。「花から実へ」では湿原の生物を題材にした生命の仕組みなど。「流水による土地の変化」では湿原においては水の流れた後がある程度残っており河跡湖なども見られる。これらを辿ることで、湿原とはどういうものか、湿原が与えた影響、水と土地の関係、実際には一歩足を踏み入ると沈んでしまうような地形はどのように出来ているのかといったことが題材となる。「重さと傾き」では、湿原の傾き。微々たる高低差であるためゆっくりと水が大きく流れ、大きな植物の変化もなくある程度広がりをもっている。これらを写真などを見てもらうなどしても良い。また、こじつけ気味であるが、アイヌの昔の秤・重りなどが題材となる。

藤田委員 「新しい生命」以降の3項目は連動するが、教科書ではメダカを題材に飼育しているが、サンショウウオやエゾアカガエル等、湿原に関わりのある動物にしてみる。水槽の藻についても売っているものではなく湿原の水生植物に変えるなども考えられる。「流水による土地の変化」では、釧路川にはダムがないことを、パソコンを使ってリアリティを出して説明したり、直線化の理由と結果を実際の河川も見ながら学習してはどうか。また、水の流れ方の模型などもあるとどこでも学習する事が出来る。「ものとのけ方」では湿原の水の色の違いを比べてみるなどの意見が出た。

<6年理科>

野口委員 6学年では項目が生物的なものが多い印象であった。「生き物のすむ星地球」では地球上で湿原の占める面積が出せれば良い。「生きていくための体の仕組み」では水の使われ方について教科書に紹介されていたが、湿原の恵みの水という意味合いを何かの方法で出していけないか、「物の燃え方と空気」では石炭や泥炭を題材として、「日光と植物」では光合成により酸素をつくる湿原という切り口から、どのくらいの量の酸素を作っているのかという話題にもつなげていける。「水よう液の性質」では湿原においての水そのものが、湧水や流水、湿原に滞留する水で性質が異なり、単元での発展学習の素材として活用できる。「生き物どうしのかかわりあい」ではタンチョウやワシを頂点とする食物連鎖、外来植物など扱うにはこの項目ではないかという意見が出た。「土地のつくり」では達古武や塘路などの地層や湧水、化石採取など、「変化する大地」では湿原の成り立ちなどを上手く話として出していければ面白い。「生き物と環境」では湿原バージョンに置き換えて授業ができ、湿原の浄化作用も教材になる。人間の生活にとっても湿原は必要で、共生することで我々の生活も豊かになるという話題につなげていけるのではないかという意見が出た。

藤田委員 「ものの燃え方と空気」では気球を上げてタイマーで空から写真を撮ってみる、これらを自分達で作ってみるといいというのも良い。「日光と植物」では湿原がどれだけ空気を作っているか量を調べてみる。「生き物どうしのかかわり」では外来生物としてウチダザリガニを題材とし、宿泊研修の時に捕って食べることで体験する。「土地のつくり」では地層から西高東低や火山との距離を推察することができる。「変化する大地」では岬という地名を題材として、昔はどのような場所だったのか、どうしてこうし

た名前がついたのかを学習してみてもどうか。「電流を生み出す力」では苦しい部分もあるが、釧路川の上流と下流の水で電気伝導率の差を調べてみるなどができる。

<社会科>

渡辺委員 社会科では1時間を全部使うのは困難であり、各項目で学ばなくてはならない内容がある中で、どうやって湿原をピンポイントではめ込んでいけるかを考えた。「農業のさかんな地域をたずねて」で日本の農業を学んでいるが、地域に根ざした農業について学ぶ部分があり、自然を生かした農業として湿原を扱っていける。「水産業のさかんな地域をたずねて」では、ここがポイントだという話題になった。教科書の中で「森は海の恋人」というタイトルがあり、森と海の間には川が存在し、川は湿原を意味するものなので、森と川をつないでいる湿原はとても大切なものであるという認識をじっくり教えることができ、最終的には環境を守ることにつながってくるという意味合いとなった。情報の単元では、例えば「ニュース番組をつくろう」という項目があり、その一つのテーマとして湿原について扱うことができる。また、インターネットで他地域と比較する学習もできるのではないかという意見が出た。「自然を生かした暮らし」では湿原の資源を生かした自分達の生活について振り返ることができる。「環境を守る」では、一年間の学習の最後の部分になるが、湿原は様々なものを生み出してくれており、自分の身近にあるが気づいていない湿原の意義、それを守ることの大切さを5年生の最後に学習することが出来るのではないかと考えた。6年生は歴史と公民分野に分かれる。歴史の中では難しいという話題にもなったが、教科書では北海道独特の歴史についてあまり触れられていないが、擦文文化の人々の生活や開拓期に湿原に入っていけなかった歴史などを紹介することで、身近なものとして伝えていけるのではないかという意見が出た。公民分野においては、自治体の動きが紹介されており、どのように湿原再生が行われているのか、ゲストティーチャーやVTR、写真等で紹介でき、国際理解としては世界とのつながりということで、ラムサール条約について話題にすることが出来る。

高橋座長 社会科については関連付けていくことが少し難しいかと考えていたが、数は少ないかもしれないが、大切なことと関連付けていけるという印象を持った。今回のワーキンググループでは、出していただいたアイデアについて討議を行うのではなく、これらを参考にさせていただいて事務局でとりまとめ、次回のワーキンググループで委員の皆さんにご覧いただき、議論を行っていききたい。

事務局 他の学年や教科でも出していただいたアイデアを参考に広げていきたい。

高橋座長 適切な学年もあるということで、小学校3学年、4学年の社会科では湿原と関わる授業が出来そうであるといった意見もいただいた。今回は任意に小学校5学年、6学年の理科、社会を対象にアイデアを出していただいたが、他の学年、教科についても本日のご意見を参考にさせていただきたい。初めての試みであったが活発なご議論に感謝したい。

その他

事務局 ワンダグリンダの紹介と募集開始のご案内をしたい。ワンダグリンダプロジェクトは今回で6年目を迎える。現在募集を行っており、募集期間は3月14日まで。釧路湿原に関わり、自然再生や釧路湿原を知ってもらうネットワーク、情報発信の一つとして使っていただきたい。

以上をもって、第7回環境教育ワーキンググループを閉会する。

以上